

ゴルドン女史著  
菅原教造譯述

美 學 講 話

全十八講

『婦人と子ども』附録

第一講 入門

第二講 心像の話

第三講 感情の話

第四講 藝術の起原と職分

第五講 リズムの話

第六講 舞踊の話

第七講 音楽の話

第八講 色彩の話

第九講 線と形の話

第十講 圖案の話

第十一講 建築の話

第十二講 彫刻の話

第十三講 繪畫の話

第十四講 言語の話

第十五講 詩の話

第十六講 戯曲の話

第十七講 散文の話

第十八講 美と藝術

## 第三講 感情の話

### 上 要素感情の話

#### 目次

感情とは何ぞや——要素感情又は單一感情とは何ぞや——意識要素とは何ぞや——要素感情の屬性——感覺の時限及反覆と要素感情との關係——感覺の強度と要素感情との關係——苦痛とは何ぞや——心的生活に於ける苦痛の意義——苦痛と不快——快及不快の職分——藝術に於ける苦痛及び不快の意義——美的快感

### 下 情緒の話

#### 目次

情緒とは何ぞや——反射動作とは何ぞや——本能動作とは何ぞや——衝動とは何ぞや——ダーウインの情緒説——ジエームスの情緒説——テウエーの情緒説——情緒即ち撞着せる衝動或は阻止せられたる活動力の意識——情緒に於ける運動的態度——情緒の内容の比較的單一なること——情緒の職分——有意的情緒及び藝術によつて喚起せられたる情緒

### 上 要素感情の話

#### 感情とは何ぞや

感情に關する大體の事は

と云ふ所で述べて置きました。元來吾々の感情生

活は非常に複雑なものでありまして、普通に感情

と云ふ言葉の示す經驗の中でも、或は情操センチメントと云は

れて居るやうな、例へば宗教的情操・倫理的情操・

第二講の初め「精神作用の知的方面と情的方面」

論理的情操・美的情操のやうに、高尚な知的な感情もありません。従てこう云ふ心的作用は、情操と云ふよりは寧ろ意識と云ふ言葉を用ゐて、たとへば美意識・宗教意識と呼びなす方が却て普通であります。又情緒エモーションと云ふやうな、例へば喜怒哀樂のやうな強い感情もありしやう。この情緒の更に強いものを特に激情パッションと稱し、情緒の極めて弱い其餘波のやうなものを氣分ムードと名けます。或は又感覺感情センス・フィーリングのやうに、例へば色や音を経験した時の直接の感情とか、飢を感じた時の感情と云ふやうに、感覺と密に合して分ち難く成つて居る感情もありましやう。斯う云ふ總てを總稱して感情と云つて居るのであります。

併し乍ら、此の情操にして情緒にしても感覺感情にしても、決して純粹なる感情的の經驗のみが表はれて居るものではなくして、皆な知的の認識的作用を含んで居るのであります。例へば日没の光景を觀て崇高なる宗教的情操を起したとすれ

ば、其眼に映じた光景は即ち知覺の働であり、此の光景に附從する深遠なる宗教的内容は取りも直さず或る觀念即ち複雑なる心像であります。又或人と争つて憤怒の情緒を起したとすれば、其争つた時の光景は心像として、又憤怒に伴ふ身體的變化は感覺として、怒りの情緒と密に融合して居るのであります。

### 要素感情又は單一感情とは何ぞや

斯る混

合物の中から、知的認識的作用即ち感覺とか知覺とか心像とかを全く捨て、しまつて、純粹に感情的の成分なり要素なりを残して、其要素を茲に取り出したと假定すれば、其者を要素感情アップ・エクションとも單一感情シングルとも稱するのであります。即ち最も簡單なる感情で、快・不快と云ふ状態を指し

て云ふのであります。或學者はこの快・不快の外に、更に興奮・沈靜とか緊張・弛緩とか云ふ要素をも加へて居りますが、此の本では快・不快の二方面に限つて居ります。

## 意識要素とは何ぞや

右に述べたやうに、

感情的生活全體に通じて、其情的の分子・因子・基礎・要素と云ふものを取り出して、是を要素感情又は單一感情と名けるのは、丁度第二講で知覺の作用を分析して、其材料又は要素として感覺を取り出したのや、記憶・想像・聯想など云ふ觀念(表象)を構成して居る基礎又は要素として心像を取り出したのと、全く同じ遣り方であります。今假りに情操・情緒・感覺・感情、又は知覺、又は記憶・想像・聯想など云ふ意識作用——複雑なものであるから意識複合體と呼ぶことも出来る——を、無機有機の化合物と見做せば、要素感情や感覺や心像は、斯る複合體を構成して居る元素である要素であると云ふことが出来まじやう。故に心理學では、此の要素感情・感覺、心像の三つ——或學者は要素感情・感覺の二つ——を、意識要素と稱して居るので、斯る要素が相合し相結んで意識と云ふ複合體を組立て、居ると見るのであります。

混合したものから引離して取り出すと云つても、決して實際の經驗を離れると云ふ意味ではありませぬ。故に感覺や心像は客觀的の知的認識的精神作用の特徴を示すと共に、要素感情はやはり主觀的の情的の心的活動の大體の特徴を語つて居ります。

今まで述べたやうな感覺・心像・要素感情と云ふやうな意識要素の話は、發達した人の精神作用を靜的に見て是を分析し解剖した結果であります。最近の心理學では、是以外に「思考」と云ふ要素を設ける人もありますけれども、これは未だ一般に認められては居りませぬ。

次に觀察の立場を少し變へて、精神作用を發生的に見、動的に見て、心的活動の大本となる働きは何かと云ふ事を考へて見ますと、これは本能・衝動等の作用でなければなりません。勿論此の衝動も本能も、今まで述べたやうな遣り方で分析してしまへば、成る程、感覺と心像と要素感情の三つ

に分けられますけれども、これでは精神作用を活動的・發生的に見た特徴が失はれて了ひます。

感情に就てもやはり其通りで、今情緒を研究すと致します。一方では情緒を靜的に見て其構造を解剖して、感覺なり心像なり快不快の要素感情なりに分折して見なければなりませんけれども、又他の一方では其動的方面にも注意して、情緒の起原とも云ふべき本能や衝動との關係を調べなければなりません。此の點に就ては本講の下「情緒の話」に於て精しく記述してあります。

**要素感情の屬性**      要素感情の屬性は強度、時限及び性質の三つであります。

先づ空間的屬性から申しますと、要素感情は空間的の廣がりを表はして居りません。此の點に於て要素感情は、視覺・觸覺及び筋肉感覺などの作用とは違つて、聽覺・嗅覺・味覺及有機感覺の或物に似て居ります。

次に強度の屬性を申しますと、要素感情には強

度の階級が澤山あつて、極度に強いものから至極穏かな所迄、程度の差がいろいろあります。感情の神經的基礎の動かされ方が少なくなつて、殆んど感情が意識されるに至らない位の時には感情が闕下にあると申します。之に反して氣絶する位酷く興奮させられる時もありますが、此の場合には感情が頂を過ぎたと申します。

次に要素感情の時間的屬性に就いて申します。元來要素感情の時限が感覺の時限よりも調査が困難なのは、一つには刺戟の調整が困難だからであります。例へば色の場合ならば、一點の青を見せて又引込める時を注意するのは容易であります。が、青の快感を起すに十分な刺戟と云ふと、非常に複雑な問題となります。同じ一點の青が感情を招致する事は事實でありますが、少しでも情況が變つて居れば左様は行きません。感情が現出し清滅する瞬間を明確に指示する事は殆ど不可能であります。

最後に要素感情の性質的屬性に就て申します。

是は心理學者の間に中々異論のあるやかましい問題で、或は要素感情の差は快・不快と云ふ二つの團體に大別され、快の團體は更にいろいろの快を含み、不快の團體の中には更にさまざまの不快が分化されて居ると説いて居ります。又或學者は快・不快の外に、更に興奮・沈靜と云ふ二團體の性質的の差を認め、又他の或る學者は快・不快、興奮・沈靜の外に更に緊張・弛緩と云ふ二團體の性質的の差を認めます。これを一と纏めにして表にすれば次のやうになります。

	感情の性質上の差		
一般の學者	快・不快		
ロイス氏	快・不快	興奮・沈靜	
グント氏	快・不快	興奮・沈靜	緊張・弛緩

又この快不快にしても、快と不快とが混合して兩立すると説く人もあり、或はこの二つは全く正反對のもので兩立しないと云ふ人もあります。更

に或人は快不快何れでもない中立の状態があると説き又或人は快に非ざれば不快、不快に非ざれば則ち快で、中間の状態は存せないと云つて居ります。

#### 感覺の時限及反覆と要素感情との關係

凡そ生きて居る限りは、如何なる瞬間と雖も、吾々の精神作用は、必ず感情と認識とが相伴ふて居るのであります。例へば感情の方の「快」「不快」の判斷と云ふものは、多く色とか音とか味とか云ふ特殊の感覺の働即ち認識的作用に就て下されるので、其の認識的の働の時間が、やはり又感情の時間なり強度なり性質なりに影響を及ぼすものであります。

非常に短かい、感覺的刺戟は概して不快になり勝ちであります。これは判然と分らぬ中に消えて了ふからで、つまり戲弄された様な氣持がするからであります。又非常に長い刺戟もちつと氣を留めて居ると、遂には不快を生ずるのは、假令其の

刺戟は悪くないにしても、飽きが来て苦痛を起す事もあるからであります。

刺戟を繼續する代りに間を置いて反覆する時は又別であります。併し餘り早く反覆されますと、チラ／＼する光の様に甚だ不快な感じを起させますが、長い間を置いて繰り返しますと、後天的趣味の場合と同じく、漸次に愉快となつて來るものであります。

感情は、引切なしの刺戟又は繁く繰り返される刺戟には順應と云ふ傾向があつて、此の順應と云ふ傾向が勝つと、無頓着になつたとか、鈍くなつたとか、馴れて了つたとか云はれます。

**感覺の強度と要素感情との關係** 極めて微弱な感覺的刺戟は、認識的方面から云つても知覺し難いもので全然氣附かれない事もあります。感情的方面から云ひますと、幾分不快な感じを起すものである事は、一般に通じて云はれて居る處であります。併し極端に強い感覺的刺戟も亦不快で、

甚しい時には苦痛とさへなる事もあります。

要するに快感を得んが爲めには、時間も中庸で無ければならぬと同様、強さも中庸を得なければなりません。感覺の働と感情の作用とは、同一法則に従ふのでは無いと云ふ事は、前にも申しました通りで、この強度の場合に就ても知る事が出來ます。

### 苦痛とは何ぞや

苦痛其ものは感情ではありませんが、感情生活との關係の密接な點に於て、感覺中比類のないものであります。

苦痛は極めて純粹なる單純なる感覺でありまして、普通によく切る、火傷する、抓る、刺すと云ふやうな言葉で説明されて居ります。併し斯様云ふ言葉は、苦痛に伴ふ經驗とか苦痛を起す手續とかを表示するに過ぎないので、苦痛がどんなものかと云ふ事は、其起つた刹那を指して見せる外説き様がありません。凡ての他の究極的性質同様、例へば青い色は、實物を示して「是れです」と云ふ



か、「青はやはり青で、青以外のものでありません」と云はなければならぬやうなもので、苦痛と云ふものもやはり経験して始めて知る事の出来るものであります。又他の感覺同様、これは幾分か正確に局限する事が出来ます。

元來苦痛は知的の作用に對するよりも、情緒に對する關係の方が遙かに密接なので、情緒と同じく、強度と衝動力とを特徴として居ります。そして争闘と名けても良いやうな情緒の働は、苦痛を包含する事も珍らしくはありません。

又苦痛の生理的隨伴作用は情緒の基礎の如きものであります。總じて如何なる種類を問はず、強い情緒の起る時には、生理作用が一般に擾亂されて來るものであります。呼吸・血液循環・分泌等に異變を來し、失神・戰慄・嘔吐等を催す事さへあります。そして是等の生理作用は劇痛にも必ず伴ふもので、呼吸の不齋・鼓動の變・涙・汗・戰慄・吐氣などは誰しも經驗のある事であります。苦痛

は其の辛辣急迫の處が感覺中第一位に居りますから、随つて強度も第一であると云へます。

心的生活に於ける苦痛の意義 劇しい痛み

程不快の確なものはありません。随つてこれは必ず注意と心的活動とを刺戟するものであります。苦痛の特徴と云ふべき處は、凡ての心的過程中、比較の標準、又は價値の尺度に最も適して居ると云ふ事でありませぬ。

これには亦原因があります。第一に苦痛は我々が日常よく經驗するので、認識も評價も非常に容易なる單一明白なる感覺であります。次に苦痛は強度の範圍が非常に廣く、輕微なる苦痛より劇痛までの活段が非常に多いものであります。最後に、苦痛は凡ての經驗中最も反應を起し易いものであります。

勿論如何なる精神作用でも、物理上の標準ほど固定不變の關係を持つて居るものはありませんが、併し苦痛は精神作用中では最も不變なもの、

様に思はれます。其證據として、苦痛を價值又は興味の尺度に使ふと云ふ事は、以下の例で推す事が出來ます。蠻族の仲間では一人前となる前に或苦しい式を経なければなりません。又中世の禁欲主義の隱者は其の忍んだ難澁が酷ければ酷い程神聖視されたのであります。亦人が或物に對して拂ふ注意の度、若くは其物の面白さは、人を其物から引放す爲めに使ふ苦痛の度に依て大體分かるのも事實であります。

故に苦痛は單に行爲を刺戟するもの、及價值としてのみならず、又快樂の度を試めす役をも持つて居る者であります。苦痛が在ればこそ快樂の存在に意義も特質も出來るのであります。如何とすれば、物を辨別せんが爲めには、何かその相手となつて對照される者が必要であるからであります。

### 苦痛と不快

苦痛は感覺であり、不快は要素感情であります。苦痛ならぬ不快はいくらもありませんが（拙い色の配合の如き）、苦痛は不快に極

まつて居るといふのは、如何なる場合にも事實であります。

苦痛の不快より確なものは無いと上に述べましたが、これにも例外は在るので、藝術起源の研究者として有名なる瑞典の美學者ヒルンの如きは、苦痛の鑑賞まで論じて居ります。故に輕微な苦痛は時により、人に依つてはかなり歡迎されるものらしく思はれます。

### 快及不快の職分

調和よく働く活動と爽快

な氣持、亂調子な活動と不快な氣持との間には、密接不離の關係があると云ふ事は、一般に認められて居る處であります。例へば上述の如く程よい刺戟は、強きに過ぎ若くは弱きに過ぐる刺戟よりも快い結果を齎らす如きであります。次に快不快の心持は或行爲が妨害を受けたか受けないかを表示するものでありまして、快とは何物か、人に合適すること、不快とは合適せぬ事であります。もう一度言ひ換へすと、不快とは低められ又は狭められた活動力を意味するのであります。

それ故若し活動力相互の間に紛争が起れば、何物かを除去しなければならぬと云ふ事は、今迄人の云つた言葉でありますが、併し又其の反對に、紛争は却て廣き包含的な活動を意味するものであり、興味が多い人程その面倒に、好んで携さはると云ふ事が出来ると思はれます。

又快樂は心的活動の全般にわたつて刺戟を與へるもので、幸福な時には考が餘計出て來るものであると一般に云はれて居りますが、これも反對で、快樂の爲めに心が懶惰になる場合もあります。

藝術に於ける苦痛及び不快の意義 苦痛・

哀愁・沈鬱等が加はつた爲めに、今までの平凡なものと詰らないものが變じて、純清・威嚴・麗美等の面目を備へるやうになる事は珍らしくありません。苦痛及悲哀は、畏懼を起させるものであります。

世界最大の悲劇の一と云はれて居る希臘の詩人ソフォクレスの作「エディプス」のやうな劇も、主人公の苦痛が人の注意を惹き且悲劇の骨子を成し

て居るので無ければ、只ゴタ／＼した事件を列べて立てた詰らぬものに過ぎません。ゲーテの傑作「ファウスト」の上卷に現はれた無邪氣な愛らしいマーグレットの悲曲は、如何にも哀な美しい物語ではありませんが、同じマーグレットがたゞ可愛い無邪氣な娘ばかりで有つたなら、果して斯う云ふ藝術上の取扱ひをされたか如何かは疑問であります。

英國の詩人たり美學者たるラスキンは「眞の美は凡べて悲哀を帯びて居るものである、美しいものが憂鬱を失へば、それは單に綺麗といふことに墮落して了ふ」と云ひ、夭折した佛國の天才美學者ギョーは「高尚な美的情緒には必ず何等かの悲しみの影が添うて居る」と云つて居ります。此の苦痛の價値に就いては悲劇の處で又た論じませう。

美的快感 藝術は少くとも其の感覺的若く

は形式的の方面に於て、必ず幾分の快感を與へやうとして居るものであります。藝術上の快感の特

質は後に論じますが、實際此の快感を起させる形式の研究は、やがて感情其物の研究となつて來るのであります。

## 下 情緒の話

### 情緒とは何ぞや

情緒は構造から申すならば、要素感情と丁度正反對に立つもので、即ち非常に複雑なものであります。要素感情のやうに、單なる快不快のみならず、多くの筋肉感覺や有機感覺又は心像を包含して居るので、要するに經驗が非常に豊富であります。此の多種多様な肉體感覺の演ずる所を了解しやうとするには、情緒の研究を其の起源たる反射的動作及び本能的動作から論じて懸からなければなりません。

### 反射動作とは何ぞや

吾々の心身の組織の中で、最も基礎たる土臺となるべきものは、或種の運動が絶えず續いて居ると云ふ事實であります。そしてこの運動は、大抵有機體を其の四圍に適

合せると云ふ事を究極の目的として居ります。中でも循環呼吸消化のやうな運動は、絶えず而も極めて規則的に起つて來まして、これが人間存在の核心となつて居るので、かう云ふ運動に依て、人は四圍に供給せられた空氣食物等を利用する事が出来るのであります。此の三種の運動は誕生と共にあるもので、遺傳的反射作用と呼ばれて居ります。もつと後に現はれて來ますけれども、嘔吐・目ばたきの如き作用も、やはり遺傳的反射作用であります。

今一種の運動は、最初は意識的に獲得したものではありませんが、これも餘り繁く行はれたが爲めに、遂に無意識になつたものでありまして、これを遺傳的の方に對して後天的反射作用と申します。遺傳的及後天的反射作用は行つて了つた後には氣がつきませんが、意識的に刺戟されるものではありません。

### 本能動作とは何ぞや

本能動作は起原は遺

傳的反射作用と同じでありますが、性質はもつと複雑で又其の目的を達せんが爲めには意識的な工夫を要します。たとへば人は大きな動いて居る物に出會へば逃げる傾向があつて、これは遺傳的作用ではありますが、併し是を實行する時は、既に意識的の計畫が含まれて居ります。又激して居る時には、戦ふ本能がありますが、それを果たすには打つ、扭ぢる、引く、突くなど極めて複雑な運動を要します。

こゝに今一番重立つた本能を挙げれば、羞耻心・秘密性・好奇心・社交性・得財心・競争心・嫁妬・兩性及親の愛・遊戯・模倣・建設等であります。そして最後に挙げた三つの本能は、美學上特に重きを爲すものでありますから、簡単に説明を加へておきませう。

遊戯はエンジェルの定義によれば、隨意筋の自由にして爽快なる且つ自然なる活動で、通常は「餘剩精力の放散」と認む可きものであります。遊戯を

して居る中は子供も大人も衣食住を直接裨益せぬこと、即ち單なる生理的存在には必ずしも必要では無いとをして居ると云ふ點に於て自由なものであります。もう一つの意味から云へば、遊戯活動は最も有用なもので、小供等に社會團體の所行を教へるものであつて、服従・共同・指導等の教訓は此の中に得られるのであります。して見ると遊戯は通常精力の指針であり、且同時に其の精力を將來の行爲に影響させる資本となるものであります。

模倣は遊戯の形として現はれる事もよくありますが、併し遊戯本能の働いて居らぬ時に現はれることも珍らしくはありません。元來模倣は人間の總ての傾向の中で最も根深い且抗拒し難いものであります。例へばつい少し前迄話をして居た人の話や様子や表情を真似るのは誰でも始終やつて居る事であります。人の真似ばかりでなく又無生物の真似もよく致します。例へば波の揺れる様、風に靡く秋草の姿、櫻の散る様子などは、いつとな

しによく吾々が眞似て居ります。此の模倣本能は藝術の鑑賞上最も肝要なものであると云ふ事は猶後に申します。

建設本能は或意味に於ては模倣の正反對であります。これは四邊のものを繰り返すより掌ろ變改する傾向で、或形に出来上つて居るものをばら／＼に引き放したり、又は別の形に組み立てる事であつて、藝術家に新奇な心像の表はれる時は不知不識働いて居る本能であります。

衝動とは何ぞや 衝動とは活動せんとする

傾向の意識で、今御話した本能が意識されると云ふのは、つまり衝動として感ぜられるのであります。又反射運動が將に行はれやうとする時に妨止されると、それは最早純然たる反射作用では無く、衝動として意識に表はれるものであります。元來衝動は意識界の一特殊部門を占めて居るものではなく、あらゆる心的状態の動的方面と見るべきものであります。それ故此の關係を言ひ換へますと

あらゆる思想及あらゆる心的状態は、衝動力を持つて居ると云ふのと同じ事であります。つまり思想があるからには必ず活動が伴ふ、即ち凡ての思想は何等かの活動に對する思想であると云ふ事が出来るのであります。

ダーウインの情緒説 有名なる英國の進化

論者ダーウインの情緒の説は以前廣く行はれた説を代表して居ります。即ち身體的態度は或精神的状態の適應の結果であるといふ意味から、情緒の「表出」であるといふ考であります。この説に従へば、拳を固めるのは怒る時に通常やる事であるから、憤怒を表現して居ると云ふ事になります。

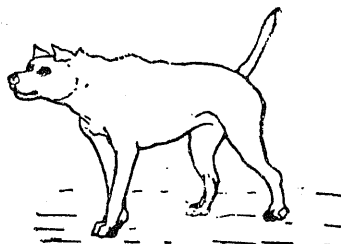
ダーウインは表情の三則を明示致しました。

第一則は利用的聯想の習慣の原則であります。

曰く「或感覺や欲望などを輕減したり又は満足させたりする爲には、一定の心的状態のもとには、或複雑な行爲が直接又は間接に役に立つ、さうすると何時でも又如何に弱くとも、同じ心の状態が誘

致されると、習慣及聯想の力に依て何の用は無くとも同じ運動をする傾向がある」と。故にいやな考を懸命に追ひ除ける時は、實際に物を逐ひ遣る時に使つた動作を其の儘やるものであります。例へば目を閉ぢ顔をそむけ、手で押し遣るなどは、過去に於て不快なものを追ひ遣つた反應なので、聯想に依て殘存して居ります爲めに純然たる思想的のものに對してもこれが起つて來るのであります。

第二則は反對の原則と云ふのであります。曰く「或心的状態は或習慣的動作を誘引しそしてその動作は第一則で述べた様に働くものである。次に正反對の心的状態が生じた時には、何の役に立た無くとも正反對の動作をする強い自然的傾向のあるものである。」此處に掲げた二つの犬の圖のスケッチは、ダーウィンがこの反對を示す爲めに用ゐたものであります。



第三則は神経系統直接活動の原則と云ふので、もつと精しく云へば、「最初より意志とは没交渉にして、或程度迄習慣とも無關係なる神経組織に基づく行爲の原則」と云ふのであります。此の題のもとには、ダーウィンが意識状態の結果とは認めて

居らぬ情緒の隨伴現象、即ち戰慄・鼓動の變化・腺分泌等がはいります

ダーウィンより後の學説は、此の第三の原則に重きをおき、第一の原則中の動作の或物は、本能的反應の中に入れました。

### ジェームスの情緒説

先年歿した

米國ハーバード大學のジェームスの有名

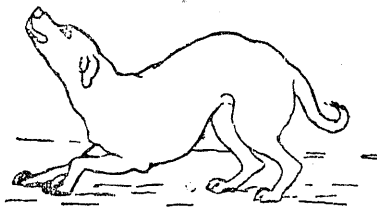
なる情緒説の中心點は、情緒に伴ふ「身體的變化」は或事實を知覺すると直に起るもので、その身體的變化の起つた時の感が即ち情緒なのである」と云ふのであります。之をシカゴ大學教授エンジェルに云はせると、「人は冷然自若として居つても恐ろし

い物、又は危険なものを理解することは出来る。併し恐怖の特質たる運動的反應と行つた後で無ければ、決して恐しいと感ずる事は無いものである」と述べて居ります。此の説の効果は情緒に伴ふ生理的變化の意志的性質を排して、本能的性質に重きをおいた所にあるのであります。

尤もこれは、人が情緒を得る前に、さう云ふ生理過程が、明白に分離した認識的要素として意識されると云ふ譯ではありません。即ち人ははじめから「私は慄へて居る動氣が激しい、呼吸が不規則だ」、などと考へてから恐怖を感じるのではありません。併かし丁度彼の色彩刺激の赤が網膜及神經中樞に働いて後（人はこれを認識しません）に赤の感覺が起る様に、或他の身體器官（人は別にこれを分析はしません）が恐怖の感を起こさせるものであります。

## デューエーの情緒説

米國コロンビア大學教



授デューエーは情緒は元來撞着せる衝動の意識であると稱して居ります。そして情緒は不規則の呼吸・戰慄等の如き身體的變化の生せぬ前に起るものではないといふ點に於て、デューエーはジェームスと同説であります。又左様云ふ身體的變化及姿勢は、以前は（種族として）必要であつた遺傳的反應の結果であると云ふ點に於て、ダーウィンとも一致して居ります（此點に於てはジェームスもダーウィンと同説であります）。

併しデューエーは左様云ふ姿勢をとる本能的傾向は、情緒の感せられる前に阻止されなければならぬとものだと申して居ります。此の本では氏の説をとりますから、以下此の原則を説明致します。

情緒即ち撞着せる衝動或は阻止せられたる活動

力の意識

人は何をするにも總てうまく行くならば、恐らくはどんな人でも純然たる習慣的の



生活を送つて、如何なる問題にも惱まされる事もなく、又勉強するにも及ばず、新らしく物に適應する方法を工夫する必要もありません。何もかも呼吸同様樂に無意識に遣つて行かれませう。

併し人は活動を阻止され、目的物を隔てられた場合にのみ、それを深く考へもし、感じもするものであります。争鬭を例に惹いてもつと精しく申しますならば、今甲の男兒が乙の男兒を打つたします。その場合に乙がすぐ甲を打ち返せば、勝つた方の兒は當然何等の憤怒も感じません、如何となれば其人は純然たる本能の督勵に従つて自然な終極まで行き、而も其間何の障碍も無かつたからであります。然るに其の反對に禮儀作法のため、もしくは相手の大きいのに氣が引けて手の出せぬ時、即ち争を好む本能が阻止された時には、乙の兒は憤怒の情緒を経験するのであります。此場合には本當は動作に出づ可き筈の力を自身の中に籠めて了ふので、そこに擾亂が起るのであります。

今一つ例を擧げて見ましやう。茲に多忙な甲と云ふ人に逢はうとして待つて居る乙と云ふ人があるとします。乙は甲に話さなければならぬ事、又甲から聞かねばならぬ事があるとします。乙は衝動に引かれてそこまで行つたので、話すと云ふ事の外何も外に目的がありません。一秒一秒と時は經つ中々待つ人はやつて來ない。乙は爲る事は無い、従つて衝動の出口が無い、その結果ぢれていら／＼して來ます。而して最後には大抵むつとして腹を立て、しまひます。

此場合には中間の未決状態に依て生じた状態が主として働いて居ります。そしてその未決状態をよく調べて見ると、甲に話さうと云ふ一つの衝動のみならず、もつと外的もの、即ち待つて居る間の時間を埋める事の出来る外の活動が阻止されて居ると云ふ事實を包含して居るのであります。故に人の憤怒は衝動の争ひを表示して居るものと見なければならぬのであります。もつと精しく云ひ

現はせば、一定の活動に依て放散せらる可き筈の精力が、放散されずに全局に滯滞して居る様には思はれ、そこに憤激と情緒とが醸されるのであります。

猶一例を擧げるならば、恐怖の場合に眞に恐ろしく感じさせるものは逃げんとする第一の衝動の阻止であります。夢の中でも、キヤッキヤと云つて馳けたり逃げたりする事の出来る中は、決して追かけて来る妖怪や魔法使を恐いと思ふことはありません。只だ何か引きとめられたり、又は身體中がしびれた様な感じのする時、始めて非常な恐怖を経験するものであります、其の無力無能の間が強烈なる情緒の瞬間なのであります。

### 情緒に於ける運動的態度

衝動は行爲せん

とする傾向であるとするれば、衝動の究極の成功及實現は何であるかと云へば、或纏まつた明白な行爲又は或行爲の特殊の改修と云ふ事でありませぬ。

無論衝動はその働いて居る最中に、何處でも

破壊する事は出来ませぬ。併し衝動が中止された時には、其衝動行爲が完成された時に起つて來べき姿勢が——少くとも一部は——必ず現はれて來るものであります。若し二つの衝動が衝突すれば、二つの運動状態の間に争ひが起りますが、身體の各部は一時に二つの相異なる姿態をとる事は出来ませぬから、二者に共通の要素、若くは兩立し得る要素のみが残るので、そして其の姿勢態度は大抵或標型的原始的反應に現はれたものであります。

猶例を擧げてもつと精しく御話致しませう。憤怒の情緒に就て申しますならば、此の情緒にはいろいろの衝動、たとへば、亂暴な事を云ふとか、間接に殘忍な事をするとか云ふやうに、いろいろの衝動がありまじやう。併し其等凡ての背後に潜み且凡ての一部となつて居るのは、齒と爪とを以てする古い原始的反應の遺物でありまして、要するに憤怒と云ふものは、イヴン狂暴王の殺氣満々たる憤怒より、最も神聖な公憤に至る迄、反抗、

反對、及破壊の共通的企圖を持つて居るものであります。そして亦これを實行するには、拳を固め、

下顎を角ばらせ、胸及び咽喉が膨らむ様な、突き出す様な運動が始りであります。かう云ふ運動は一面から見れば、或は原始的行爲の殘物に過ぎない無用のものであるとも云はれませうが、併しもし情緒と云ふものが必要であるとすれば、左様云ふ反應は文明人にすら極めて必要であると云はなければなりません。如何となればかう云ふ反應は情緒の基礎であり、是が無くては純然たる思想上の事物に對する抗拒すら爲し難いのであります。

猶羞耻の情を例に惹いて、もつと精しく御話致しましやう。この場合に最も勢の強い反應は、再び斯様云ふ破目に陥るまいと云ふ内心の決意許りの様にも見えませうが、併し其時すぐに現れる姿勢、即ち人目を避けて逡巡し、顔を隠さうとする態度は、凡ての羞耻の形に共通の點となつて表現して居るのであります。而して斯う云ふ情緒が

無かつたならば、人は果して内心で決意をするか如何か疑問であります。

### 情緒の内容の比較的單一なること 強い情

緒の襲來は人を盲目にするもので、激情は是非善惡の差別を失ふものと通常云はれて居ります。衝動の對象は極めて概括的な實行し難い形式に於てのみ心に存在するもので、碎いて云へば何を欲するかと云ふあてが判然として居りませぬ。もつと精しく云へば、熟考を経た行爲の方案と云ふ様なものは無いのみならず、却つて實行し得可き方案又は心像の不足、缺乏と云ふ事が、情緒に缺く可からざる要件なのであります。若し相反する衝動の兩者を代表する具體的な詳細な方案が出來たとすれば、其の時は感情の高潮期は既に過ぎ去つて了ふのであります。

尙感情の盲目の一證據は半病理の場合に徴する事が出來ます。即ち一旦起つて而も頑強な抵抗に遇つた感情は、色々の方法の中何れかに依て滿

足を求めます。荒れ狂つて居る人は、荒れ狂つて居る獸同様、何でもあれ始めて出會した物に怒りを溶びせ懸けるもので、或一つのものに對する複讐が延いて只だ一般の破壊を目的とする様になるのであります。

情緒經驗の單純な事は、別々の人でも感情に大差はないのに徴しても明らかであります。人の知る如く、情的同感<sup>同感</sup>は智的<sup>智的</sup>一致より迅速に且容易に擴がります。たとへば獸ですら、恐ろしい、悲しい、なつかしいなど、云ふ事は了解が出来ますけれども、他人の思想を了解する事は比較的少數の人にしか出来ません。要するに情緒は一個人を一種族と結合し、智力は一個人を一種族と區別するものと謂つて宜しいので、偉人は情緒の爲めではなく、その思想故に目立つのであります。

情緒は盲目であると上に申しました。これをもつと制限して申しますと、情緒は具體的細目に就ては盲目でありますが、それと同時に或一點に就

ては明らかに物が見えます。精しく云へば、相争ふ二つの衝動に共通の要素は、取り出されて強さを増して實現されるのであります。例へば直に破壊する事の出来ない關係に悶えて居る人があるとしませう。すると逃れんとして阻まれた衝動は、

「何時か如何かして逃げやう」と云ふ決心の形、即ち兎にも角にも逃げると云ふ一般の意味になつて残ります。故に情緒の内容にはこの一般的企圖の記號即ち象徴がはいつて居ります。身體の態度の感情と云ふものは、つまり左様云ふ象徴の役を務めて居るものであります。

### 情緒の職分

第一に情緒は代表的のもの

で、過去の經驗を代表する記號となるものであります。たとへば良心及趣味の情緒に於ては、過去の道徳上と藝術鑑賞上の訓練——過去の經驗の象徴即ち記號——が固結した糟となつてはいつて居

ります。今或る實際の場合に當つて見るとします。其方向に於ける凡ての過去經驗が、智的判斷とし

てのみ意識に現はれると云ふ事は決して出来ない  
のであつて、幾分は情的反應に依つて代表されて  
居るのであります。これは過去經驗の凡ては其の  
情緒を形作る事を助成したものであるからであり  
ます。

第二に情緒は經驗を統一し、且それを實際上に  
連續するもので、情緒がある爲めに、いろいろの  
複雑な經驗に條理が立ち、且つ相互の間に聯絡が  
取れます。故に情緒の役目を一言に申せば、色々  
の活動を總括的な題目のもとに集めて統一する  
と云ふ事になります。尙例を擧げて述べるなら  
ば、説明が一度び愛・同情・嫉妬・恐怖・憎惡等に及  
べば、誰しも「成る程」「無理ならぬ事」と許してし  
まひます。即ち斯様云ふ情緒は、物事をする一般  
的且究極の「理由」、又は「根據」と認められて居る  
觀があるので、人は人の行爲の背後に潜む情緒を  
知る迄は、それを十分理解する事は出来ないもの  
であります。

佛國の文豪バルザックはそのカタリーヌ、ド、メ  
ディシの研究中、カタリーヌの生涯に現はれた矛  
盾を解いて、それに依て理義透徹した明晰な長い  
歴史を編みましたが、バルザックは、カタリーヌ  
の矛盾した行爲を解くには、その主權に對する熱  
望―權力の愛―を以てしたと云つて居ります。即  
ちこの情緒に依てバルザックはカタリーヌを説明  
したのであります。

第三に情緒のある所には必ず新しい行爲に對す  
る條件と刺戟とが伴つて居ります。如何となれば  
相反せる力と力との争ひは、結局二者の何れとも  
異なる妥協を生ずるからであります。尙例を以て  
説明するならば、情緒の高潮せる瞬間は、全人格が  
激せられ全生涯の興味が一の新しい形に密接固着  
する瞬間で、たとへば彼の宗教的大狂歡が生涯の  
變化を來すなども此の一例であります。極言すれ  
ば情緒は危機クライシスを意味し、クライシスは變化を意味  
するものであります。

故に要言すれば情緒は、過去經驗を代表するものであり、種々の經驗を統一するものであり、又何等か新しいことに對する刺戟となるものであります。

**有意的情緒及藝術によつて喚起せられたる情緒**  
人は情緒を勝手に即ち有意的に起す事が出来るものでせうか、又は自然に即ち非有意的に二つの衝動が相抵觸するのを待つて居なければならぬのでせうか。ジェームスの説に據れば、或情緒に適應する姿勢を取るのは、實地に情緒を起す捷徑であると云つて居ります。即ち有意的に情緒を起す事が出来るのであります。それ故生理的變化を忠實に真似れば真似る程、十分に且純粹にその情を感ずると云ふ事になります。

人が感情を激動させるには通常その感情を構成する衝動に訴へます。元來其等成分たる衝動に對する有效な刺戟は何であるかと云ふ事がよく分かつて居らなければ、情緒を起こす事は出来ないの

であります。故に藝術家が其の作品に依て人の情緒を刺戟しやうと云ふには、先づ觀照者の心に衝動を起させる工夫をしなければなりません。情緒の傳達に最も有力な道具は、摸倣本能であります。例へば彫像なり俳優なりを見る人が其の姿勢を真似る様になれば、其人は既にその藝術の主眼たる情緒を生ずる第一歩を踏み出したものと云はなければなりません。

〔正誤〕 前號の北齋筆富士百景は上下顛倒して居りました。  
印刷の失態を謝します(編者)